

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月20日現在

機関番号：41503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成21年～平成24年

課題番号：21520559

研究課題名（和文） 外国人介護士のための地域共通語を使用した介護日本語教材と指導法の開発

研究課題名（英文） The development of care workers Japanese educational materials and guidance instruction, for foreign care workers, to facilitate communication in local common language

研究代表者

後藤 典子 (Noriko Goto)

東北文教大学短期大学部・総合文化学科・准教授

研究者番号：50369295

研究成果の概要（和文）：

本研究では、日本語を母語としない介護士や介護士を目指す学習者（以下非母語話者）が地域共通語（以下地域語）を多用する山形の介護現場で、コミュニケーションを円滑に行うための地域語教材『聞いてわかる 介護の山形ことば』を開発した。介護士や利用者の会話の録音を中心とした調査や、接触場面での調査などに基づき、使用される山形地域語の特徴、外国人にとっての理解となりやすい特徴、気づかれにくい違いを中心に教材を作成した。

研究成果の概要（英文）：

This research deals with the development of 'Listen and understand, caring in the language of Yamagata' local dialect educational material in order to support care workers and those in training to be care workers for whom Japanese is not their mother tongue (hereafter 'non-native Japanese'), and examines how to facilitate smooth communication in care institutions, where the local common language (hereafter 'local language') are used frequently. Centering on both analysis of recorded conversation between facility users and care workers and contact situation conversations between facility users and non-native Japanese, distinctive characteristics of local language which for non-native Japanese are easily misunderstood or difficult to pick up, form the basis of the creation of these educational materials.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：介護地域語教材、介護現場、コミュニケーションストラテジー、配慮、接触場面、音声教材

1. 研究開始当初の背景

(1) EPAによる外国人介護士の来日

EPAによる外国人介護士候補生の来日で、日本の介護現場における外国人の存在は特別なものではなく、介護施設での研修を目的とした日本語研修プログラムや、語彙・表現のデータベース、介護の専門用語のやさしい日本語などが開発され始め、外国人介護士候補生受け入れに伴う日本語教育分野での支援が急がれるようになった。

(2) 地方の介護現場で使用される地域語の実態

地方の介護現場では、方言が使用されているという認識はあったものの、実態把握はほとんどなされていなかった。本研究においては、方言ではなく、「地域共通語」という用語を用いた。山形は方言の種類が多く、また最近では人々の移動によってそれらの方言も地域限定のものでなくなり、「〇〇方言」という括りではあらかたなくなっているためである。山形市周辺の地域で一般に使用されている方言を含む言語表現を山形「地域共通語（以下地域語）」とし、特定の地域の方言という形ではなく、地域で使用されている言語表現一般を表す意味で使用した。

実際にどのような地域語が使用され、非母語話者にとってはどのような地域語が必要となるかを把握する必要があった。

(3) 外国人に対する地域語教育

日本語教育において、地域語教育は、生活語として使用頻度や必要性の高いものを「理解語彙」として教えるというレベルで十分であるという捉え方が主流であった。しかし、介護現場での言語活動を考える場合、非母語話者でも、一人の社会人として責任ある仕事をするためには、その社会で使用されている地域語を習得が必要な言語として捉え、円滑なコミュニケーションを目指した地域語教育が必要となってきた。

(4) 本学の状況

山形のような地方においては、大学生活や地域での日常生活においても、地域語は使用されている。筆者らは1997年に、『山形ことばを学ぼう』という教材を作成し、筆者は上級者を対象に地域語教育を行ってきた。地域語の文法や、音変化の説明などを行って、日本人の友人やアルバイト先の日本人が話している意味がわかった、などの感想が得られた。しかし、一方で、方言色の強い地域での体験学習などでは、地域で使用されているこ

とばは、あまり理解できなかったという感想もあった。

本学の介護士養成のための人間福祉学科で外国人を受け入れることとなったが、人間福祉学科では、2年間で58日間、介護施設での実習が必修となっている。その際、介護現場では方言色の強い地域語が使用されているが、実習を実りあるものとするためには、地域語の指導が必要であった。しかし、介護現場の地域語を指導するための実態把握がなく、指導のための教材もなかった。

2. 研究の目的

研究の目的は、山形市周辺地域の介護施設で使用される地域語の実態を把握し、非母語話者にとって指導が必要な地域語を探り、実際に介護現場で実習や仕事を行う上でのコミュニケーションに役立つ教材と指導法を開発することである。

介護現場の接触場面において、不理解となる地域語表現を把握し、どのようにして不理解を解消していくか、その方法を工夫すること。また、介護現場で見られる配慮に関して異文化による理解不足や誤解などを回避するため、日本人介護士の地域語使用などに見られる配慮の工夫についても、その特徴を明らかにし、非母語話者のコミュニケーションに役立つような教材の開発を試みた。

3. 研究の方法

(1) 教材開発のための調査

介護現場での地域語使用実態と非母語話者の地域語理解を把握することを目的に以下の調査を行った。

<調査1> 施設利用者と非母語話者の会話の録音調査

施設利用者（以下利用者）が、外国人だとわかる相手にどのような地域語を使用するか、またその地域語を非母語話者はどのように理解するか、どのような地域語表現が非母語話者は理解しにくいかを把握するために録音調査を行った。調査対象はデイサービスの利用者12名（山形市在住）、非母語話者（韓国・中国留学生各3名）。お話しボランティアという形で、利用者と留学生が1対1で話をし、その会話を録音した。その録音データを、実際に話をした非母語話者と地域語母語話者それぞれが文字起こしを行った。文字起こしデータから、利用者が非母語話者に対してどのような地域語を使用したかを見た。また、非母語話者の文字起こしデータと、地域語母語話者の文字起こしデータの比較から、非母

話者の地域語の理解・不理解について分析した。

<調査2> 介護日本語教材本文（会話部分）を基にした内省による地域語化調査

一般的に学ぶ必要のある介護場面の日本語が地域語ではどのようにになっているか、その特徴を把握するために、『専門日本語入門—介護篇—』（海外技術者研修協会編）の本文（会話部分）20課分について、山形市内の介護施設で働く介護士5人（20～30代 男1名、女4名）の内省による地域語化を行った。

<調査3> 介護施設内での24時間の発話の録音調査

調査2の、教材を基にした内省では現れてこない、介護現場での地域語の使用実態を把握するため、24時間の会話を録音した。介護士4名（男1名、女3名うち1名は非母語話者）にICレコーダーをつけて勤務してもらって録音データを取り、その録音データの文字起こしを行った。介護現場の場면을網羅的に把握するため、24時間の録音を依頼した。

（2）教材の開発の方法

上記の調査結果から得られた結果に基づき、以下の4点を考慮して教材を開発した。

- ①地域語の特徴がはっきりわかるように
- ②利用者と介護士の地域語のスタイルの違いが学べるように
- ③自然な音声で、
- ④どのように音変化しているか、どのような意味を表す地域語なのか、が詳しくわかるように

①については、教材の本文として、「地域語の特徴がはっきり出るような」場面を設定した。利用者については、日常の受け答えを行う場面である「体調確認」と、より自由な発話が見られる「レクリエーション活動の時間」を設定した。介護士については、大きく会話の相手によって、「利用者と話す」「介護士同士で話す（申し送り）」「利用者の家族と話す」の3つに分けた。これは、②の「利用者と介護士の地域語のスタイルが学べるように」という工夫でもある。「利用者と話す」は、介護士が利用者の行動を発話によって促す必要のある場面である「移動介助」と「食事介助」の場面を設定した。「介護士同士で話す」については、「夜勤の申し送り」の場面を設定した。「利用者の家族と話す」は、入所時や利用者の状況の詳しい説明などの場面は、日本人介護士が主となって伝える場面となると考えられたため、「家族が帰るところ」の場面を設定した。スタイルの違いを学ぶことは、日本人介護士は無意識に行っている相手や場面によるスタイルの変化とその配慮の違いに気づき、異文化から引き起こされる誤解を回避することにもなると考えた。

複雑な音変化が不理解の大きな原因だったので、複雑な音変化の理解を目指し、以下の点を考慮した。③の「自然な音声で」を目指し、地域語母語話者によるロールプレイングで本文を録音した。本文の SCRIPT は、ロールプレイングの文字起こしにより作成した。

また、不理解となることが多い複雑な音変化を、非母語話者が理解できるように工夫した。④の「どのように音変化しているか、どのような意味を表す地域語なのか、が詳しくわかるように」という目的で、本文の地域語には、共通語訳だけでなく、その部分の文法や音変化などについての解説をできるだけ詳しく載せるようにした。

また、これまでの地域語教育の実践から、くり返し学んで地域語を体系的に理解する必要があると考え、「山形ことばの文法ポイント」を別冊の形でつけた。項目は、本文で扱った文法項目だけでなく、山形の地域語の特徴全体を把握できるような項目とした。本文の解説には、文法項目と番号を付して、「山形ことばの文法ポイント」と関連づけた。

4. 研究成果

（1）調査結果から得られた介護現場の地域語の特徴

「利用者が使用する地域語」と「介護士が使用する地域語」について、上記の調査結果から得られた介護現場の地域語の特徴を以下に示す。

①非母語話者に対する地域語使用

相手が非母語話者であると認識した状況でも、利用者は地域語を使用している。非母語話者が聞き返しなどを使用しても、地域語の不理解によるものという認識はなく、内容の不理解という把握の下、地域語を繰り返す状況が多く見られた。日常20代～40代の地域語話者の場合は、相手の地域語の不理解を認識し、共通語に置き換えて発話することが多いが、利用者の場合はその認識は少ない。

②利用者の地域語の特徴

利用者の地域語は、日常20代～40代の地域語話者が使用する地域語より、方言色の強い地域語が多く見られる。方言色の強い地域語とは、「地域語の特殊音」「地域語語彙」「指示語・間投詞など」「地域語使用による複数の音変化の組み合わせ」などで、これらは非母語話者には不理解となることが多い。

③非母語話者の地域語理解

非母語話者は、表面上はコミュニケーションを滞らせることがなくとも、地域語の理解は難しく、特に複雑な音変化の地域語表現について不理解となることが多い。

上記調査1では、お話ボランティアとしてフリートークを行ったが、不理解部分に

については、非母語話者は滞り回避のストラテジー（あいづち・聞き返し・笑い・話題の変更など）を使用し、会話を維持した。また、調査3の介護施設内での実際の会話においても、不理解が生じ、何度も聞き返しや確認を行い理解しようと試みられていた。いずれも、複雑な音変化のところでは不理解が生じている。

④ 介護士の地域語の特徴

④-1 使い分け

介護士が使用する地域語には、相手・場面による使い分けがある。介護士の使用する地域語は「利用者に対して」「介護士同士（申し送りなど）」「利用者の家族に対して」で違いが見られる。

④-2 利用者に対して

介護士が利用者に対して使用する地域語は、個人差はあるものの、文体は「です・ます」を使用するなど丁寧さが含まれる地域語表現が多い。一般的に山形の地域語は、親しい間柄で使用され丁寧さのない表現が特徴であるが、介護士が利用者に対して使用している地域語は、丁寧さの含まれる表現が中心であった。

利用者が介護士の言うことを理解していないようなとき、利用者が問題を抱えているとき、利用者の気持ちに近づこうとするときなど、方言色が強く丁寧さの少ない地域語表現を使用している。

行為に添えることばなど、介護でよく使用されるものは共通語の定型表現をそのまま使用することが多い。

④-3 介護士同士（申し送りなど）

介護士同士は、親しい仕事仲間ではあるが、仕事に関してはフォーマルな表現を多く使用している。個人的な依頼の文や、報告などでは文を続ける場合の接続部分などに地域語表現が使われることが多い。また、介護でよく使用される略語や専門用語が多く使用される。

④-4 利用者の家族に対して

共通語では、敬語を多用するが、山形の地域語では丁寧な文体にとどまることが多い。

④-5 敬語表現の特徴

介護士が使用する地域語は、いわゆる敬語表現は少なく、代わりに「～てける（共通語の「くれる」にあたる地域語）」「～てもらう」などの授受表現の使用が多い。

（2）地域語を使用した介護日本語教材『聞いてわかる 介護の山形ことば』の開発

上記の地域語に関する調査結果を生かし、介護日本語教材『聞いてわかる 介護の山形ことば』を開発した。

教材の構成は、第1課から第5課までの本文と解説と、別冊の「山形ことばの文法ポイント」から成る。第1課は、「利用者さんが

使う山形ことば」で、第2課から第5課までは、「介護士が使う山形ことば」である。これらは、会話の相手によって、「利用者と話す」「介護士同士で話す（申し送り）」「利用者の家族と話す」に分かれている。

教材は各課共、本文スクリプトとその共通語訳を見開きで載せた。それぞれの本文毎に、複雑な音変化や特徴的な地域語を注の形で解説して意味を正しく理解できるようにし、「山形ことばの文法ポイント」の該当部分と関連付けて示した。複雑な音変化の聞き取り対策として、同様の音変化が含まれている聞き取り練習を準備し、実践につなげることができるよう工夫した。本文と、聞き取り練習の音声が付録CDに入れ、くり返し音声が聞けるようにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3）

①後藤典子・熊坂聡・三瓶典子・澤恩嬉・齋藤美徳・山上龍子、介護保険施設利用者と留学生の会話の分析－山形地域語の理解を中心に－、山形短期大学紀要第42集、2010、13-26

②後藤典子・澤恩嬉、地域におけるプロフィシエンシー－地域語の理解・不理解を中心に－、日本語プロフィシエンシー研究会国際シンポジウム「生活日本語とプロフィシエンシー」、2011、125-127

③後藤典子・山上龍子・澤恩嬉、介護現場の山形地域語教材『聞いてわかる 介護の山形ことば』の開発、日本語教育方法研究会誌 vol.19 No.1、48-49

〔学会発表〕（計 2 件）

①後藤典子・澤恩嬉、地域におけるプロフィシエンシー－地域語の理解・不理解を中心に－、日本語プロフィシエンシー研究会国際シンポジウム、2011年7月18日、函館国際ホテル

②後藤典子、介護現場の山形地域語教材『聞いてわかる 介護の山形ことば』の開発、日本語教育方法研究会、2012年3月11日、国際基督教大学

〔図書〕（計 1）

後藤典子編、聞いてわかる 介護の山形ことば、2012、61

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤典子 (GOTO NORIKO)

東北文教大学短期大学部・准教授

研究者番号：50369295

(2)研究分担者

澤 恩嬉 (SAWA EUNHEE)
東北文教大学短期大学部・准教授
研究者番号：50389699
三瓶典子 (SANPEI NORIKO)
東北文教大学短期大学部・准教授
研究者番号：60537760
齋藤美穂 (SAITO MIHO)
東北文教大学短期大学部・講師
研究者番号：70537761
山上龍子 (YAMAKAMI RYUKO)
東北文教大学短期大学部・非常勤講師
研究者番号：90461722
熊坂 聡 (KUMASAKA SATOSHI)
東北文教大学短期大学部・非常勤講師
研究者番号：30389697